

一般演題3-4

当院における高気圧酸素治療の開設からの経過と課題

春田良雄 長江宏則 市橋孝章 小山昌利
野掘耕佑 市橋藍子

公立陶生病院 臨床工学部

【はじめに】

当院は愛知県西部に位置するベッド数716床、標榜科20科の2次救急病院である。2001年4月に高気圧酸素治療装置を導入して今日まで治療を行っている。治療開始時は、知識も経験もないため名古屋大学医学部附属病院から指導を受けて開始して現在に至っている。そこで、今回10年が経過して高気圧酸素治療装置の更新を行なったので、治療開始から現在までの治療状況、課題について検討したので報告する。

【HBO導入経緯】

1999年秋、瀬戸市は陶器の町であり陶芸作家の自宅兼作業場で、作品を焼く作業中に窯の不完全燃焼により一家4人がCO中毒になり当院に搬送された。当時、高気圧酸素治療装置がなく、救急車で1時間圏内の2病院へ搬送した。そのため、救急医療を行う当院にも必要と判断され高気圧酸素治療装置を導入した。

【対象】

2001年4月から2013年3月までに当院で行った高気圧酸素治療を対象とした。

【治療装置】

第1種治療装置ゼクリスト社製高気圧酸素治療装置2800Jを使用した。

【結果】

当院が治療を開始して現在までの12年間に179件の依頼があり1891回の治療を行った。疾患別の内訳はイレウス56件、骨髄炎40件、突発性難聴30件、CO中毒急性19件、網膜中心動脈閉塞症14件、壊死性筋膜炎6件、その他14件であった高気圧酸素治療装置の使用科別では、外科が58件、耳鼻科30件、整形外科22件、救急科20件、歯科口腔外科16件、眼科14件、その他の診療科19件であった。緊急と非緊急の割合は、依頼件数で102件と77件、治療施行回数は345件と1546件であった。(表1)緊急項目の疾患別平均治療回数はイレウスで3.3回、CO中毒で7.3回、壊死性筋膜炎で14.3回、突発性難聴7.8回、網膜中心動脈閉塞症3.7回であった。(表2)非緊急項目の平均治療回数は骨髄炎で22.1回、間歇型CO中毒64.3回であった。

【考察】

高気圧酸素治療装置を導入して治療を行ってきたが、開設当初は安定して依頼があったが徐々に減少傾向になり存続の危機に陥った。その後、院内勉強会で高気圧酸素治療を行うようになり、院内周知を行った結果、依頼件数は増加に転じた。(表3)しかし、中部地方での大学病院での高気圧酸素治療施設の閉鎖、医師の移動に伴い高気圧酸素治療装置の存在を知らない医師の増加が原因で減少したのではないかと考えられた。病院収益に関しては緊急治療が依頼件数では多いが、治療回数では非緊急治療が依頼1件当たりの回数が多く治療回数に比して悪く、緊急治療の依頼を増加させる必要があると考えられた。しかし、適応疾患全般に使用していない状況が確認できたが、今後使用していない疾患の適応を増やすことにより、高気圧酸素治療装置の稼働率が上昇すると考えられた。

【結語】

東海地方にも当学会の地方会を開設して、広く高気圧酸素治療の普及を行う必要があると思われた。

表1

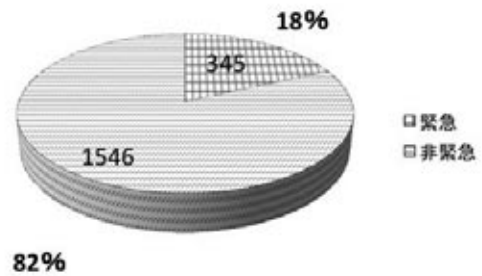


表2

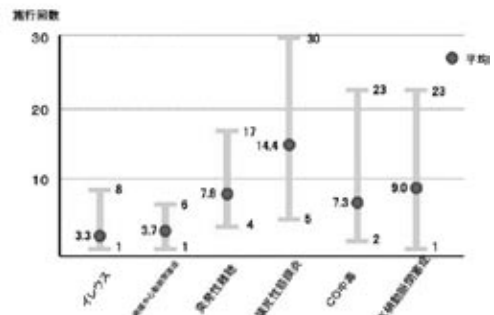


表3

